



海外の浄土真宗事情

第2回 北米開教の沿革と歩み 其の一

浄土真宗本願寺派のアメリカ合衆国における開教は、北米大陸とハワイ州における沿革と事情が異なる。ここでは米国本土に拠点を置く「米国仏教団」の沿革とその歩みについて概要を述べる。

本願寺派が米国で開教伝道を正式に開始したのは、一八九九（明治三十二年）のことで、すでに百年余りの長い歴史を有する。

特に本願寺派が、日本の他宗派に先駆けて開教したことで、米国最大の仏教団体の一つを形成していることは特記すべきことであろう。

それは当時の本山当局の「海外開教」に対処して先見性を支え、積極的に理解を示された二十一代門主明如上人の、開明的な思召おもほせがあつたことは明記されねばならない。

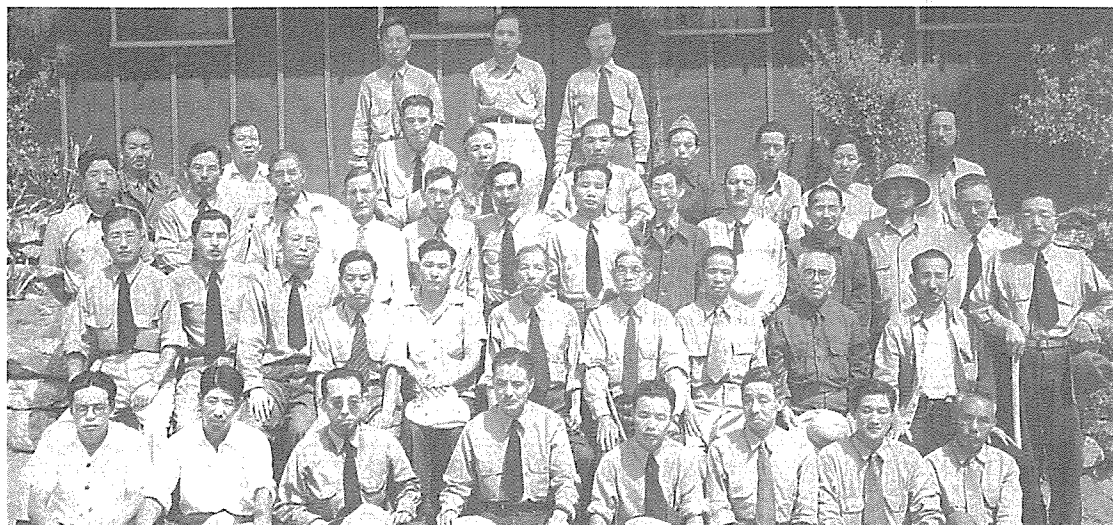
このような海外開教という大きな趨勢すうせうを作った発端は、一人の移民仏教青

年の信念によつたことは今でも語りつがれている。

平野仁三郎青年は、当時のサンフランシスコの日本人移民社会を見た時、早くからキリスト教が、渡米してくる多くの移民に、英語教育、職業の斡旋あつせん等を援助しながら、キリスト教への入信を強く勧誘している事態を憂慮していた。

一八九七（明治三十）年、訪日して、本山の特別法要に参拝した折、たまたま野外布教をしていた西島寛了、山田将為の両師に会い、自分が体験している移民社会の宗教事情を説明した上、是非北米の地に仏教の伝道を開始してほしいと懇請したのであつた。

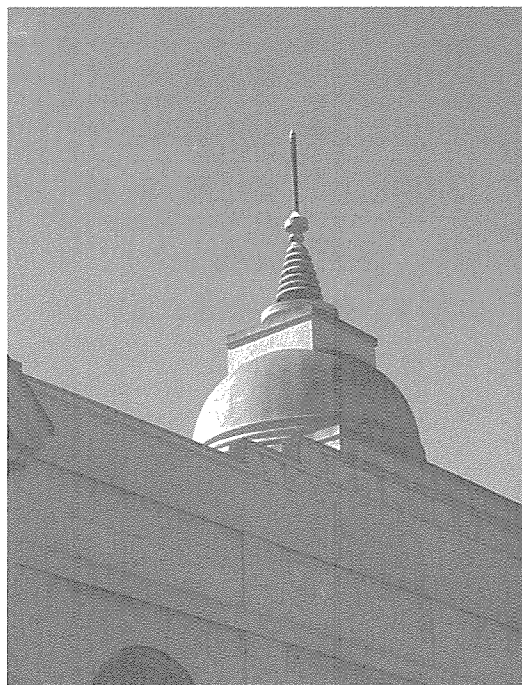
この一青年の熱心な要請こたに応え、本山はその翌年、本田惠隆、宮本惠順の両師をサンフランシスコに派遣して現地の実情の調査にあたらしめた。その機会に、灰田勝五郎医師を中心とする三十名余りの仏教青年有志が会同してアメリカで最初の「仏教青年会」を発



収容所内の開教使。



最初の出張所。1899年の日付が入っている。



サンフランシスコの仏舎利塔。

足せしめた。一八九八（明治三十二）年七月のことである。

この青年会は連名して、即刻に布教使の派遣方を本山に陳情したところ、本山の内部には若干の反対派もあったが、大勢は「海外開教」という大義を推進するため開教使として蘭田宗恵師、開教副使として西島寛了師を一八九九（明治三十二）年六月サンフランシスコに派遣したのである。

この本山の対応は広く移民社会から信頼された。なぜなら特に蘭田師は文学寮（龍谷大学の前身）長の重責に在った人だけに、とかく「移民社会」と軽侮されていたところに、本山はもとより学者としても一級の人物を開教監督の任に当たらしめた本山の対応は賢明であった。在米の仏教徒を勇気づけたのはいうまでもない。同年九月二十四日サンフランシスコ本願寺出張所が正式に発足したのである。

蘭田師は短い在任中、日本人移民が在住する各地を訪問、その地に仏教青

年会を結成せしめ、それが後の「仏教会」創立の機縁にもなった。さらにサンフランシスコにおいて、一般アメリカ人に対する伝道を初めて行い、英語伝道の端緒もつくっている。

その後、大恐慌を経て、一九三五（昭和十）年には、将来を見据えて、五十万ドルを目標とした開教財団が設立された。また、シャム（現在のタイ国）国王より仏舎利ぶつしゃりが贈られ、増山顕珠総長と、後に最初の二世開教使となる角田昇氏がシャムに渡り、仏舎利を捧持し帰米したことは特記すべきことである。

この当時の教勢は開教使六十一名、仏教会三十六ヶ所となっている。

この頃より日系人排斥はいせきが激しさを増し、一九四一（昭和十六）年の開戦に伴い、西海岸の日系人十二万人が、敵性外国人として各地の収容所に強制的に送られた。収容所内ではある程度仏

教活動が認められたが、心の傷は今でも彼らの心の奥に残されている。

その中の一つ、ユタ州トパスの収容所内で、市民権を持つ若い日系二世二十九名が中心となり、今の「米国仏教団」が結成されたのである。一九四四（昭和十九）年五月二日のことである。

終戦後、活動を再開した教団の最初の事業の一つが、現地での開教使の養成機関の設立である。一九四八（昭和二十三）年にバークレーに仏教研究所を設立、後一九六六（昭和四十一）年には正式に仏教大学院として活動を開始し、現在に至っている。（続く）

（北米開教区開教総長 梅津広道）